

父親の子育て

——男性の自己実現という視点から

汐見 稔幸

東京大学大学院の教育学研究科教授、同大学附属中学前校長。専門は教育学、教育人間学だが、三人の子どもの育児に実際にかかわる中で、人間学の研究対象を育児や保育のほうに移してこられた。子育ての実体験から、父親の子育て参加、家族の問題についての論考を重ね、多彩なメディアで発言を続けている。

高石 本日、残念ながらご都合により汐見先生においていただくことができませんでした。できるだけ出演したいということでしたが、再入院の必要が生じたということでご願いがかないませんでした。汐見先生のご講演を楽しみに来られた方々には、本当に申し訳ありません。六月に研究会の講師としてお越しいただいたときの録画がございますので、後半の部分を見ていただくことで今日のご発表に代えさせていただきます。と思います。

今回の講演のタイトルは「父親の子育て——男性の自己実現という視点から」ですが、六月の研究会では「男の子育て——中間世界の喪失と男の生き方を中心に」というタイトルでお話しいただきました。二時間ほどお話しくださったので、ビデオを上映する前に、全体の要旨を私からご

紹介させていただきます。

汐見先生は二〇年ぐらい前、ちょうど一九八〇年代中頃に「現代における父性」というテーマのシンポジウムに参加されたそうです。そのときにある男の方が、「最近、親父の会や育時連（男も女も育児時間をー連絡会）というグループができていることを新しいムーブメントとして評価したい」という発言をされました。それに対して、当時ニュージブランドの大学で教員をしておられた千種・木村スチーブンさんという方が、「そんな評価をしておられないのか。なぜ日本人の男性は群れないと何もできないのか。もっと個人の責任において父親をやらねばいけないのではないか」という批判をされたそうです。そういう場面が非常に印象に残って、そのことをきっかけに、日本の男性が父親をやるうとしたときいったいどんなスタイルをとって出てくるのか、そういう集まりをポジティブにとらえられるのか、とらえられないのかというあたりを検討したいと思われるようになったということでした。

日本人の男性が集団をつくるメンタリティは、さかのぼれば日本のムラ社会にルーツがあります。戦後の高度経済成長時代、農村の男性が集団就職で都会に出てきて、都会の企業社会にムラ社会の論理を持ち込みました。県人会や同窓会や労働組合などを作ったわけです。汐見先生はこれを、個人と社会の間に位置するということで、「中間組織」と呼んでおられます。人々は、中間組織に帰属することで安心し、そのことで自分のアイデンティティを保つてきま

した。

ところが、一九九〇年代頃から労働組合はほとんど力を失いつつあります。個人は裸のままの自分として企業の論理に組み込まれるようになってきて、男性は非常に不安な状態になってきました。それと同時に、どこからか「男性も育児をすべきだ」という社会的な圧力が高まってきました——この「どこからか」という表現が面白いですね。そういう圧力と、中間組織を求めていた男性たちのニーズが合体してできたのが、親父の会や育時連のような組織だったのではないだろうかということです。

今日では、日本の社会全体の倫理的な風土に中間的なところがなくなっています。中流社会もなくなってきました。全体が勝ちか負けかとか、○か×かとか、善か悪かとか、二項対立の二分法で成り立つようになってきた。これは、人間にとっては非常に不安なことです。子育てにおいても当然そういうメンタリティは持ち込まれていて、子どもも、早くから良いか悪いかということをしつけられていく。それには非常に問題があると汐見先生はおっしゃっています。子どもの自我が、鉄アレイ型の自我に育ってきているのではないかと。鉄アレイというのは、両方に重りがあるって、真ん中が細い棒で繋がれています。そういう自我構造になってきていて、それは非常に折れやすいということです。汐見先生は、資料をあげながら、かつて日本では父親が子育てをしていたことに言及されました。本来男性は、子育てにおける中間的なものを育てていくのが役割でもあつ

たと。しかし戦後、そういうものが喪失されてしまった。そういうなかでお父さんたちがなんとか中間組織をつくらせて子育てをやろうとし始めたのは、第一段階としてはボジティブに評価できることかもしれない。でも、ただオヤジたちが集まって慰め合っているだけ、そこで遊んでいるだけでは、自己愛的、自己満足的な組織に終わってしまう可能性もある。研究会の席では、「マスターベーション」という厳しい表現が使われていました。

今の時点ではなんとも判断できないけれども、今後そういったところを父親がしっかり意識して、自分の個を成熟させながら、子育ての領域においても中間世界で子どもを育てるところに向かっていければ、今、組織をつくっているお父さんたちが頑張っていることも意味を成してくるのではないかと。結論はまだ見えないけれども、そういう問題を提起することはできる。このようなお話だったと記憶しています。

それでは後半部分を二〇分ほど上映いたします。先生の生のお聞きいただけたいと思います。

少子化問題の根底にあるもの

日本では、これだけ少子化問題が言われているにもかかわらず、なぜ男性の生き方はほとんど変わらないのでしょうか。ここに興味深いデータがあります。去年（二〇〇五年）の秋、内閣府の男女共同参画局が発表した「少子化と男女共同参画に関する社会環境の国際比較報告書」という調査です。

これは、OECD加盟国の中で国民一人当たりの総生産が一
万ドルを越える、いわゆる先進国二四カ国の比較調査です。
これを見ると、日本が先進国であるというイメージは全部壊
れます。日本はたいへんな後進国だということが露骨に表れ
ています。

たとえば、男性の育児時間は二四カ国中で二四位ですし、
男性と女性の育児時間の比率はいちばん格差が大きい。主要
なものほとんどピリカ、ピリから二番目です。労働時間の
長さは韓国が一位で、日本が二位。家族と一緒に過ごす時間
を増やしたいと考える人の割合は、アメリカは七八%、フラ
ンスは七三%、日本は三六・八%。これもピリです。要する
に日本のサラリーマンは、家族と一緒に過ごす時間を増やし
たいと考えていません。

どうしてそうなのか。家族と一緒にいるときに、「これは楽しい」とか「子どもと一緒にいると本当に幸せだ」と感じるためには、楽しむスキルがなければいけない。あるいは、それが人間にとつての生きがいだという価値観がなければいけない。しかし、日本の男性にはそういうものを与えられるチャンスがないんです。だから、家族と一緒にいるよりは、外へ出て仕事のことを考えているほうが落ち着く。こういうデータはいくらでもあります。これを見ると、日本の社会はしばらく救われないう絶望感にとらわれてしまします。合計特殊出生率^{*}が1・25から大きく増加する見込みはまずないでしょう。少子化が克服されない本当の理由にはまだ誰も切り込めていません。

日本社会における倫理的風土の二項性

日本社会というものを考えれば考えるほど、ヨーロッパとは似て非なるものだという感じがします。戦後、日本社会は二項対立性を重視して進んできました。「進んだ西洋、遅れたアジア」という二分法、「進歩か反動か」、最近では、「勝ち組か負け組か」、学校では「○か×か」ですね。最大の問題点は学校教育だと思っています。受験的知識は、正しいか間違っているかしかありませんから。でも答えなんて絶対一つじゃないんです。「いろんな意見があつていい」「世の中に一つしか答えがないものはちよつとしかない」、そういう教育をしていかないといけない。それには大人が、「自分自身の考えを一生懸命模索することが成長することである」という成長観を持たないといけない。そういう教育を赤ちゃんのときから徹底していかないと今の社会は変わらない、という気持ち私は持っています。

一時期、日本は一億総中流だと、つまり貧乏人と金持ちの真ん中が多いと言われていました。それはある種の幻想だったと思います。そういうふうと言われることによつて、日本には中間世界が豊かにあると錯覚していたのではないかと思います。しかし本当は、日本社会には「正しくもあり間違いでもある」という中間世界がとても乏しいのです。高校進学

※合計特殊出生率とは、一五歳から四九歳までの女性の年齢別出生率を合計したもので、一人の女性が仮にその年次の年齢別出生率で一生の間に生むとしたときの子ども数に相当する。人口を維持するために必要な水準は、2・1といわれています。

率が九〇数%もあり、人々が親の学歴に関係なく出世競争に参入できるという国は世界でも珍しいです。そういう意味では、日本は大衆教育社会です。教育によって人間を出世させていこうということが、大衆的なレベルで起こっている。そういう風土は江戸時代からあります。でも、そういう社会的な風土の中で、勝ち負けというものが二分法的に問われてしまふ風潮がますます強まっているような感じがいたします。

最近の育児風土の変化

いま、母親のほうにも同じような中間世界の喪失という問題が起こっています。最近の育児風土の変化が、母親をそういう世界に追い立てています。今は子どもたちを「ちよつと外に行つて遊んでおいで」と地域社会に出すことができない社会になってきている。子どもたちは、外に出て集団で群れて遊べば、冒険する楽しさだとか、けんかしてもちよつとしたら仲直りできるだとか、そういう社会性や冒険心、身体的能力、手の器用さなどを身につけられる。それらは、かつては親が手取り足取り教えたのではなくて、地域社会の遊びに巻き込まれたり仕事に巻き込まれたりするなかで身につけたものです。いまそれができなくなりつつある。

地域社会のなかで子どもを育てるやり方を「放牧」に喩えるなら、家庭は厩舎に対応します。かつては家族がその厩舎のなかで、子どもにいろいろな仕事を手伝わせていました。「ちよつと火を起こして」とか、「水を汲んできて」とか、「それ、皮をむいて」とか。そういう仕事も失われつつあります。

それによって家庭における厩舎環境の生産性がなくなつて、家庭は消費するばかりの場所となつていく。そういうことが一挙に起こることによって、子どもを外に放り出しておけば育つということがなくなり、仕事を手伝わせて、文化的能力を身につけさせるということもなくなつた。

結局育児は家庭の中でやるしかなくなつたんですね。その家庭の中にいるのは圧倒的に女性であつて、父親は仕事でなかなか帰つてこない。したがつて、女性だけが育児をやらなければいけなくなつた。育児の女性化です。先ほど言ったように、かつて日本は男性が育児の多くの部分を担っていたんですが、それがなくなつた。そうなると当然、母親がしつかりしないと子どもはちゃんと育たないということになります。から、どうしても子どもにも過剰な指示が飛び交うわけです。「それはやめてちょうだい」とか、「これをしなさい」とか。それから、「ああ上手」「もつと頑張りなさい」という過評価。家庭内化、女性化、指示化、過評価化等々が現代の育児の特徴です。

これでは子どももうまく育たないし、親のほうもストレスをためていくだけです。ですから、こういう家庭内化、女性化、指示化、過評価化という傾向を緩和するようなシステムをなんとか作つてくる必要があつたのに、それが圧倒的に遅れています。そのために、母親が子どもに「それはだめ」「これをしなさい」と、して良いこととしてはいけなさを先に指示する育児になっています。子どもはほんの幼い頃からお母さんが「良い」と言っていることをし、「だめ」と言つて

いることはしないように強いられていく。そうすると、良いことと悪いことの中間にある、別にどっちでもない、ただ面白いから一生懸命やるという心の中間世界が子どもからどんどん減っていくわけです。

こういう環境では、「これは自分が好きだから、面白いからやる」と自分の心のなかで膨らませていく部分がうんと減って、良いか悪いかとか、社会の期待に応える部分だけが先に膨らんでいく。私はそのようにして形成された自我を、両端に良いと悪いがあって真ん中が細かい、「鉄アレイ型の自我」と言っています。そういう精神的な中間世界が欠けた自我が非常に早くから形成されてしまう。そのまま大人になっていきますと、発想が二分法的になり、良いか悪いかどちらかにすぐに決めたがったり、「やっぱ私が悪いの?」「あなたが悪いのよ」と結論を性急に求めるような大人になる。どちらでもない世界が当たり前なのに、それでは気持ち収まらない。そうして自分を追い込んでいく。アダルトチルドレンと言われるような人はほとんどそうです。

家事はアウトソーシングできるようになって、随分楽になりました。しかし、かつてアウトソーシングしてきた育児は逆に全部家庭内に持ち込まれてしまつて、そのために膨大なことをやらなないといけなくなっている。親になる人たちは育児の訓練をほとんど受けさせてもらえないのに、そのやり方次第で能力を評価されてしまう。女性たちはゆとりを失い、常に追い立てられています。企業社会に適応を強いられている男性もまた、中間世界を喪失している。日本社会全体に、

社会の構造としての中間世界の未成立と、精神的な中間世界の喪失が並行して起こっているという感じを私は持っています。これは大変な危機です。

豊かな中間世界を作り出していくために

では、それをどのように克服していくか。まず、「これは良い。これはだめ」と先に指示し、できたら褒めできなければ頑張りなさいという図式の育児から、子どもを解放していかなければいけない。そして、良いも悪いもない、面白ければいいんだ、一生懸命やっていたらいいんだよと子どもに言わなければいけない。何をして遊ぶかは子ども自身が選べばいいんです。危ないからどけておいてやるということは親がやるけれども、良いから遊んでいい、だめだから遊んではいけないということではない。そういう自分で選べる世界を子どもにも保障していく。子どもが精神的な中間世界を膨らませていくチャンスをつくっていく。そのためにはやはり、母親だけが育児をやっているだけではだめです。父親が参入することによつて、「別にいいじゃん」「おもしろければいいじゃん」という論理を持ち込まないといけない。

そういうことができるようになるためには、母親も父親も、自分自身の中にある精神的な中間世界の弱さを克服していく必要がある。そのために、「良いも悪いもない、ただ面白い」ことがどんなにできるようにしていく。それは、親がもつと遊べるようになるということです。私がいろいろ子育て支援でかかわっているなかで劇的に効果を感じるのには、子どもの

育て方や接し方が上手になるということではなくて、親がばかみたいになつて遊べるようになったときですね。

たとえばこの間、五月の終わりに、北海道の札幌にあるトモエ幼稚園というところに行ってきました。このトモエ幼稚園は山の中にあります。今の社会では、自然の中でないと子どもは豊かに育たないということで、わざわざ山の中に移したんです。一〇〇人ぐらいの子どもがいるのですが、そこを訪れてびっくりするのは、朝から大人が何十人もいることです。子どもを車やバスで連れてきて、そのまま帰らないで親もそこで一緒に遊ぶんです。赤ちゃんを背中に背負っているお母さんもいっぱいいます。昼ご飯をつくっているお母さんのグループがあれば、ハーブ畑をつくっているお母さんもあるし、子どもの写真を撮りまくっているお母さんもいます。そこでほかの子どもの世話をしたり、一緒に遊んだりして、子どもとのかかわり方を覚えていくんですね。「これが幼稚園の姿だ」と、園長は言っていました。確かに親はものすごく成長していきます。

そのとき、「汐見先生が来たから」ということで、その園でよくやっている行事を特別にやってくれました。流しそうめんです。たくさんの子どもと親が食べますから、とつても大規模なものです。大きく伸びる梯子を斜めに組み立てて、ポール紙で作ったといの大きいのにビニールをかぶせたものに乗せて、水を流して、下のプールで受けるんです。長さは十数メートルあって、たくさんの子どもたちが食べていました。

ひとしきりそうめんを流し終わると、今度はそうめん以外

のものがいろいろ流れてきます。果物が流れてきたりね。「もうないの?」と言ったら、「ちよつと待って」と言う。今度は何が流れてくるかと思つたら、お母さんがザアアと水に乗って流れてくるんです。お母さんが流しそうめんになって下りてくる。僕が連れていった男性園長たちも、「面白い」と言つて、水着になってみんな流れていきました。そういうのが楽しくてしようがないと、みんなではか騒ぎするわけです。

以前、その園長さんは、「汐見さん、こうやってそうめんになったお母さんは変わるんだよ」と言いました。「何が変わるんですか」「見事に子どもにも優しくなる」「なんでですか」「たぶんね、ここに来ているお母さん方は、子どもは自然の中で育てるのがいいと頭では思っている。でもみんな、自分がこういう場所で育った経験をもつ持っていない。子どもたちは、『先生、捕まえたー』と蛇なんかをいっぱい持つてくるよ。うな、野猿みたいな生活をして目を輝かせているけれど、親のほうには残念ながらそういう経験がない。自分がそうめんになって流れるときに、初めて自分の大人としての見栄だとか、こういうことは恥ずかしいだとかというものを、パーツととつてしまふんですね。」

「良い人間にならないといけない」とか、二分法的な「これは良い、これはだめだ」とかいうことに適応してきた自分を、パーツと一回壊してしまう。ばかになる。自分が子どもになる。こんなことして遊べる自分が嬉しくてしようがないんですね。また園長は、「この親はしょっちゅう仮装大会をやる。何かになりたがるんだ」とも言っていました。何か別のもの

になることで、逆に自分を取り戻せるのかもしれませんが。こういっただことは、さっきの鉄アレイ型の自我でいうと、真ん中を膨らませていくことだと思っっています。良いも悪いもない、ただ面白い、楽しい世界を体験できる自我をつくっていくこと。それは、自我論から見た子育て支援の課題だと思っ
ています。

今日はお話ししませんが、このことは日本の男性の自殺率の高さ、出生率の低下、日本の男性の労働時間の長さなどの問題ともつながるでしょう。戦後ずっと続いてきた社会の中で、父親は自立した個人となりながら自己責任で判断していくことを訓練されずにきた。そのことで今、精神的に非常に不安な世界に追い詰められている。この構造を打ち破る論理がまだ提案されていないことが最大の問題だろうと思っています。親父の会などの組織のもっている可能性はこうした現実との関係でもっと論じられなければならないでしょう。

父親の育児という小さな窓口から見えてくる問題は意外に大きいのです。それは、日本の戦後の近代化の質の問題です。まだ、こうすればいいということとは十分見えていません。抽象的な提言に過ぎなかったかもしれませんが、そういうことを考えているということ、今日はお話しさせていただきますました。